



(上) 東京外国語学校の正門と校舎(明治 32 年)



(上) 西ヶ原キャンパス航空写真(1997 年)

【展示参考書籍】

東京外国語大学史編纂委員会 編『東京外国語大学史—独立百周年(建学百二十六周年)記念—』

(東京外国語大学、1999 年)

東京外国語大学百年誌編纂委員会 編『東京外国語大学沿革略史』(東京外国語大学、1997 年)

大学文書館企画展示

展示期間：2012 年 3 月 22 日

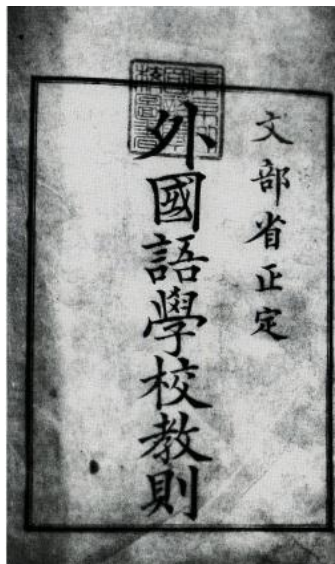
～2012 年 6 月末日

展示場所：図書館一階ギャラリー

1. 前史～東京外国語学校(旧外語)の誕生

東京外国語大学の起源は、安政4年(1857年)蕃書調所の設置にさかのぼり、本学はペリー来航に始まる外国・外国語研究・教育の需要の高まりを背景に発展してきた。

明治維新を経た明治6年(1873年)、開成学校(東京大学の前身)の予備門及び通訳の養成を目指し、本学の前身である東京外国語学校(旧外語)は官立の外国語学校として設置された。この旧外語は二葉亭四迷(長谷川辰之助)、平生飢三郎ら著名人を擁していたが、明治18年(1885年)実学重視(特に商業)に流れる社会的風潮とそれを推進した森有礼の文教政策に逆らえず、東京商業学校(一橋大学の前身)と合併され、一時廃止される。



(左)「外国語学校教則」
官立の外国語学校の設置を規程。

(下) 神田火災後の新校舎(1922年)写真。

本学は度重なる火事・震災・戦災により校舎移転を余儀なくされてきた。



2. 東京外国語学校の独立

日清戦争(1894-95年)後、東アジアにおける更なる対外的発展を目指す日本にとって、海外事情に通じる専門家の養成は急務であった。そのため明治29年

(1896年)には、帝国議会貴族院・衆議院の両院に「外国語学校設立二関スル建議」が提出され、「外国語二熟達スル士」を養成する必要性が訴えられた。そして翌年(1897年)には、東京高等商業学校の附属学校として外国語学校が設立される。そして、東京外国語学校は、明治32年(1899年)東京音楽学校、東京美術学校とともに専門学校として独立する。

独立後の東京外国語学校は当初一部の科を除いて、志願者・入学生はそれほど多くなかった。しかし、日露戦争の勃発を転機に、世間の東京外国語学校に対する評価は高まり入学志願者が増加してゆく。そして、志願者の増加に伴い、馬來語、ヒンドスター語、タミル語、蒙古語の各科が新設された。

3. 東京外国語学校の生活

第一次世界大戦(1914-18年)後、従来の外国語科に加え、貿易科・殖民科を置く東京外国貿易殖民語学校の設置が議会で決定された。この決定は外国語学校を再編するものであったが、外国語学校の当事者には全く知らされていなかった。そのため職員・生徒、卒業生は「外国語」の校名が変更されることに反発し、校名存続運動を展開した。結果、今日まで残る「外国語」の校名の存続が決定された。

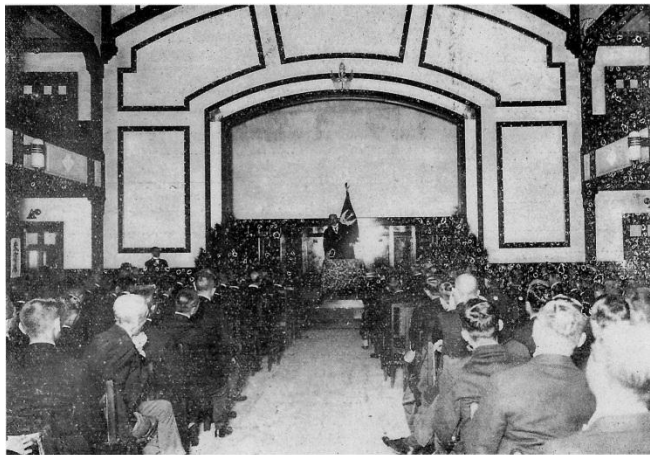


(左) 語劇大会の「絵葉書」 詩劇『王なればこそ』(西語科)・史劇『新馬説』 宮越教授作(支那語部)

また東京外国語学校時代、現在の外語祭の起源となる講演会(1900-08年)が開始された。講演会は語劇大会(1919-28年)、語劇大会(1930-36年)と名を変え、外国語学校の名物行事として発展してゆく。

(下)創立 25 周年記念式典

1922 年 10 月、6 日間に渡り記念式典を挙げる。



しかし、恐慌(1929 年)から戦争へと時代が傾くにつれ、外語生・卒業生もまた戦争に駆り出されていた。特に昭和 16 年(1941 年)以降、学生・生徒の在学・修業年限は短縮され、18 年(1943 年)には文科系学生に対する徴兵猶予が停止された。結果、1941-43 年度の入学者の八割を超える学生が学徒出陣として戦場に赴いた。

その後、軍国体制下の 1944 年、東京外国語学校は修業年限 3 年の東京外事専門学校として改変されてゆく。

(右)「東京外事専門学校規則規程等綴」
学則第一条
では「皇国ノ道」が掲げられた。



4. 東京外国語大学一(1)発足から発展へ

戦後、新制学制への移行に伴い東京外事専門学校も、大学への昇格を目指した。昭和 22 年(1947 年)11 月、「学校昇格準備委員会」を学内に発足し、「外国の言語とそれを基底とする文化一般につき理論と実際」について研究・教授する外国語大学への改組を申請する。これを受け昭和二十四年(1949 年)5 月末、東京外国語大学の設置が文部省より認められた。

その後、政府が「国費外国人留学生制度」を整えてゆく中、本学は外国人留学生の受け皿となる教育機関として、1954 年に留学生別科を、昭和三十五年(1960 年)留学生過程を発足させる。また同時期には、

学科の増設(1961 年アラビア科、1964 年ベトナム語学文学)や大学院外国語学研究科修士課程(1966 年)の設置、全国共同利用研究所としてのアジア・アフリカ言語文化研究所の学内設置が為され、本学は高等教育機関として発展する基礎を固めてゆく。

5. (2)学園紛争から現在

1960 年代後半、全国の大学を学園紛争の嵐が襲った。東京外国語大学は、東京大学、東京教育大学(筑波大学の前身)とともに、国立の「最重症三大学」と呼ばれた。紛争が長期化する中、構内にはバリケードが敷かれ、ついには機動隊も導入され、1968 年度の卒業生の大部分は翌 69 年 6 月 28 日に中途卒業する事態となる。



(左)学園紛争(1968-70 年)時の教室写真

その後学園紛争の収束に伴い、西ヶ原キャンパス(当時)は整備拡充され、1977 年には大学院地域研究科修士課程が増設された。これにより戦後、本学が志向してきた「語学・文学研究」と「国際関係・地域研究(Area Studies)」の二本の柱が整い、本学はわが国において地域研究の中心的な研究・教育機関として役割を果たしてゆくことになる。

1990 年代以降の大学改革の中、本学は従来の言語科目(語科)別の教育体制から脱し、より広範な地域文化の研究・教育を目指す体制への転換を図って行く。そして 2012 年 4 月より「言語文化学部」と「国際社会学部」の二学部化の時代を迎えている。



(左)西ヶ原キャンパス

シリーズ大学文書館① ー大学文書館の発足ー

2012年4月より東京外国語大学に大学文書館が発足しました。

大学文書館の主な役割は、大学の教育・研究活動に関わる資料を継続的に収集・整理・保存し、学内外の方が資料を利用できる環境を整備することです。現在、大学文書館には創立百周年記念の大学史編纂事業に際して収集された資料が保管されています。しかし、これらの資料は明治期から続く大学の長い歴史に鑑みて、量・質ともに非常に少なく、過去の大学の活動を伝えていく上で心許ない状況にあると言えます。

そのため大学文書館は、将来に渡って大学の歴史を伝え遺してゆくべく、大学の過去の資料を収集してゆくだけでなく、現在の大学の活動を伝える資料の収集・保存を実施していきます。ご理解とご協力のほど宜しくお願いいたします。

大学文書館の活動



収蔵資料を用いた展示



収蔵資料の整理・保存

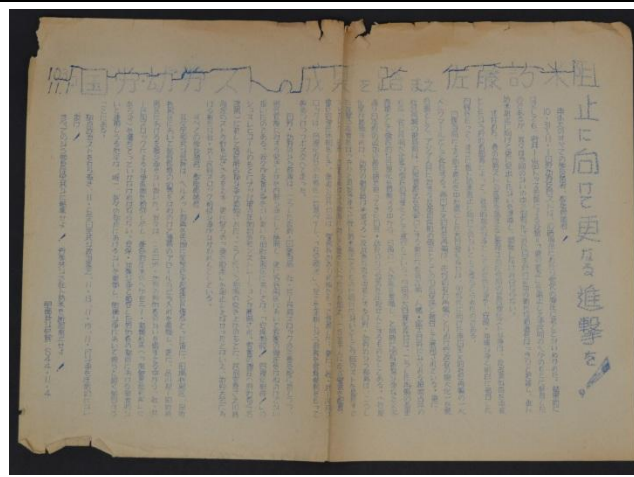
ー失われゆく資料を守るためにー

われわれの身の回りは様々な情報を持つ資料であふれています。授業のノートやレジュメ、試験の答案用紙や卒業論文、学務に提出した申請書など、われわれは日々の活動の中で資料を生み出しながら生活しています。

しかし、こうした資料は後世には中々残りません。戦争や災害によって資料が失われたり、長い時間が経つ中で忘れ去られ紛失してしまったりすることも多々あります。資料は誰かが意識的に残してゆかねばしなければ残らないものだと言えます。

その一方で、大量の資料が複製・頒布される現代社会において、日々膨大に生産され続けるすべての資料を残すことは不可能です。

大学文書館では、大量に作成されながらも失われやすい資料を未来に遺すため、より「今を伝えるにふさわしい」資料を評価選別し、保存する活動をしています。



破損した1970年前後の資料
酸性紙問題も資料保存を妨げる要因

ー資料寄贈のお願いー

大学文書館では、東京外国語大学の教育・研究に関わる資料を収集しています。ご寄贈頂ける資料がございましたら下記連絡先までご一報頂ければ幸いです。また、大学の歴史および資料に関するご意見・ご質問等につきましてもこちらへご連絡ください。宜しくお願い致します。

大学文書館 (東京外国語大学研究講義棟 600 室)

Tel:042-330-5842

e-mail: tufsarchives@tufs.ac.jp

